

〈教育学系 FD 委員会報告〉

教育学系 FD 活動報告

教育学系 FD 活動報告

Ⅰ. 2010年度第1回授業力・研究力アップ研究会

1. 開催概要

(1) 日時

2010年7月8日 15:00-17:00

(2) 場所

教育学系大会議室 (人間系学系棟 B532)

(3) 発表者及び発表テーマ

上田孝典助教「社会教育研究と教育・授業実践」

佐藤博志准教授「大学院におけるスクールリーダー教育—バックワード・マッピングを活用した学校変革プランの作成—」

2. 発表内容

〈発表1〉上田孝典「社会教育研究と教育・授業実践」

社会教育は、すべての人、とりわけ青少年及び成人が「あらゆる機会、あらゆる場所」で「自ら実際生活に即する文化的教養を高め得る」(社会教育法第三条) ような機会にアプローチするための権利として、教育行政の中に位置づけられ実施されてきた。発表者は、大学での教育・研究に携わる中で常にこのことを念頭におき、自ら実践していくことを心がけてきた。そのために、研究者として客観的な立場でフィールドに関わりながらも、教育者として学生をフィールドに連れて行き、時には当事者として関わらせ、市井の人々の学びの姿を通じて、主体的な市民となるための「実際生活に即する教養」を学生一人ひとりが経験的に体得する機会を大切に考えてきた。

今回の報告では、4事例を取り上げながら、これまでの教育・授業実践について発表を行った。その概要は以下の通りである。(うち3事例を抜粋)

方針：①地域に根ざした大学として、大学の外部・地域社会とのつながりを重視すること。②大学の持つ有為な資源(専門知、教職員、学生、高等教育機関)を社会の中に位置づける。

対象：教職課程を履修する学生及びその他の学生有志(留学生)

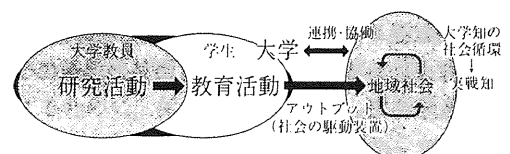
ねらい：①教員の研究活動を、学生への教育活動と関連づけること。とくに、教員だけで調査研究を行うのではなく、学生を参画させることで、教員の研究成果が学生にフィードバックされることが期待できる。

②講義中心の教育だけでなく、体験型の学外活動を通じた教育機会を創出すること。講義中心の授業だけでなく、キャンパスの外にこそ、人々が暮らす地域を見ることが出来る。

③大学教員がコーディネーターとしての役割を果たすこと。大学と地域社会(と行政・学校)が連携を図り、地域社会から失われつつある「若い力」を活かすネットワークの構築と相互の協働から醸成される相乗効果によって、地域の活性化と学生への教育を図ることが期待できる。大学の持つ専門的知的資源(大学知)を地域に還元する(地域貢献)発想を乗り越え、大学が大学知の地域循環によって社会を駆動させるドライブ要因としての役割を果たす視点が必要である。

④取り組みの成果を地域にアウトプットすること。地域での取り組みは必ず各自が記録をし、参加者全員でまとめと振り返りを行い、可能な限り地域に対してプレゼンテーション・フィードバックを行うことで地域に対して貢献しながら、学生への教育的効果も期待できる。

以上をまとめたのが下図である。



事例1. 2007年ユネスコアジア太平洋センター (ACCU)「大学生国際交流プログラム」
—「伝統的“遊び”を通じた異文化・自国文化の理解促進と保存協力の推進」(ブータン王国, 2008年7月)—

内容: 大学生の国際交流文化事業の一環として, “遊び”をテーマに, ブータン王国の学生と交流事業を行うため ACCU から助成を受ける。(学生9名を派遣)

実践活動: 本プログラムの実施に向けた事前準備として, ブータンに関する勉強会をはじめ, “遊び”をキーワードに日本の伝統的遊びについて調査を行った。帰国後は「振り返り」を通じて報告書を作成した。さらに自主的活動として, 小学校1校, 高校2校で国際理解や途上国開発支援などのテーマで学生による授業を行った。効果: 授業計画の作成を通じて, 学生が自らの経験を客観的に意味づけることができ, 子どもたちに分かりやすく伝える難しさやプレゼンテーションの技術などの直接的な学習成果もあった。

事例2. ドキュメンタリー映画「神の子たち」
自主上映会の企画

内容: フィリピンのスラムを長年にわたって記録したドキュメンタリー映画「神の子たち」上映会と監督の講演会を, 大学で中高生を対象に行う。

実践活動: 授業履修者たちの発案により, 企画, 広報, 実施まで行った。様々な試行錯誤と失敗を経て, 自発的な企画案を学生自身の手で作ら上げた。

効果: 自主的な発案による企画を成功させるために, ポスター作成, 市内中学高校への告知依頼, 監督の講演計画, など一連の事業を学生が役割分担をしながら円滑に進めていった。またなぜこの企画を行うのか, どの様な問題提起をするのか, など自主勉強会を重ねることで, この映画に込められたメッセージを深く理解し, その背後にある途上国をめぐる開発の課題についても学んだ。

事例3. 2009年度文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業(秋田市雄和地区)

内容: 秋田県秋田市雄和地区にある文化的資源を再発見するために, おもな4つの資源(大正寺おけさ, 俳句, やまはげ, 交響曲「雄和」)を取り上げ, 地域住民の参加型ワークショップを開催する。最後に, 雄和の文化を「雄和学」として保存継承の観点から考えるシンポジウムと4つの事業を舞台パフォーマンスとして演出した。

実践活動: 学生や地域の住民にワークショップへの参加を呼びかけ, ポスター作成, 講師依頼など学生主体となって事業を実施した。また学生(留学生)が体験活動として地域に入り, 民泊や実演をすることで地域との交流を図り, 農山村地域の暮らしと文化を経験した。

効果: 合併により秋田市の周縁に位置づけられた雄和地域(旧雄和町)が, そのローカル・アイデンティティを確認し, 消えゆく文化的価値を再認識することが事業主旨であった。こうした農山村の直面する現実を学生自身が確認し, その意味を問い, 自分の故郷との比較を通じて日本社会の課題として捉える視点を獲得できるように思われる。また日本の農山村に伝統としてある歴史的・文化的蓄積と暮らしの智慧など, 新しい発見が多く見られた。さらに一連の事業を学生主体で計画することで, 大学と地域, 関係者らをコーディネートする力量の重要性を認識した。

社会教育の主要な研究テーマに, 公民館における地域住民の「学び」の考察があるが, 全国の実践分析からは公民館の職員, 公民館主事の「学び」を組織する役割が不可欠の要素として指摘されている。様々な地縁・人縁を媒介としながら織りなされる各地域の特性に依拠し, 職員は「学び」の種を見つけ出し, 人をつなぎ, 関係機関をコーディネートしながら, 学習を組織化していく力量が求められている。

上記の事例からは, 学生が実際の体験を通じて, 社会教育職員に求められる地域を見る眼差し, 企画力, コーディネイト力などを獲得する

ことができたのではないかと考える。同時に、地域においても大学生というよそ者を排除するのではなく新鮮な風として受け入れ、彼／彼女らから柔軟な発想やエネルギーを得たという。ともすれば閉鎖的になりがちな狭い地域社会にとっては、よそ者である大学が刺激を与え、地域を活性化させる「先」に向けた学習につながった。授業を核にしなが、自らの研究を組み込み、授業の外に向けて広がる取り組みを学生とともに展開していくことが、体験的に理解を深める授業実践として有効なのではないだろうか。

〈発表2〉佐藤博志「大学院におけるスクールリーダー教育—バックワード・マッピングを活用した学校変革プランの作成—」

学校経営計画は、戦略的な学校組織マネジメントを実施するために不可欠である。長い間、日本の公立学校の学校経営計画は抽象的であった。近年、教育委員会等の指導により、学校経営計画が少しずつ具体的に記述されるようになってきた。だが、多くの学校では、校長が学校経営計画を単独で作成し、年度最初の企画委員会と職員会議で報告している。これでは教師はやらされ感が募ってしまう。学校経営計画を作成する際、校長は方向性と論点を示した上で、副校長・教頭、主任とブレインストーミングを行うことが望ましい。

学校経営計画の作成過程を変更するだけでは、十分ではない。今日、大量消費社会、高度情報化社会、知識基盤社会の到来などによって、保護者と子どもの意識が変化し、学校教育への期待・要求が高まっている。同時に、子どもの学習レディネスの多様化・学力格差の拡大、「子どもに言葉が届かない」という教師の危機感の高まり、他者とのつながりづくりが苦手な子どもの増加などによって、学級経営、学年経営の困難が増している。実際、「現在の学校は限界に達している」という教師の声がよく聞かれるようになった。

こうした状況において、教師の意識を改革し、

学校組織における学び合い・助け合いを生成させ、子どもの豊かな学びを実現することが求められる。そのためには、学校経営計画を、戦略的、中期的、未来志向的な学校変革プランに進化させなければならない。戦略的、中期的、未来志向的観点に立った組織マネジメントなしには、今日の学校はその限界を克服できないからである。以上の問題意識から、発表者は、岡山大学教職大学院の担当授業「校内研修のマネジメント」（2008～2009年度）において、演習「学校変革プランの作成」を行ってきた。

この演習では、第一に、学校の概要、学校の長所と課題、経営リソースを明確化する。①学校の概要を確認する。学校の概要は、学校要覧等の既存の文書に記載されている。その項目は、学校教育目標、学校の沿革と地域社会、教職員数、児童・生徒数、学級数、校務分掌、カリキュラム等である。②学校の長所と課題を確認する。学校の長所と課題は、既存の学校評価データ、学力データ、授業観察の結果、養護教諭が保有する情報等を参照して明らかにする。学校の長所と課題についてグループ・ディスカッション等を行い、課題意識を共有することが望ましい。③経営リソースを確認する。経営リソースは、人材、設備・施設、予算、カリキュラム、知識とアイデア、時間を意味する。まず、これらの経営リソースの所在を確認する。次に、経営リソースの学校裁量（校長裁量）を確認する。

第二に、バックワード・マッピング (backward mapping) を行う³⁾。①3年先の「学校の未来図(好ましい未来)」をイメージし、記述する。基本理念、子ども像、教師像の観点から描く。まず、三年後にどのような子どもに育ててほしいかを考え、実践の展望を明確化する。次に、子どもが成長して働き始める未来社会を想像する。未来社会で子どもが生活を送れるようにするために、子どもは学校でどのような能力を身につけるべきか、教師はどのような態度を持つべきかを考える。②「未来図に到達するための組織的計画」を記述する。「未来図」に到達するために、何を、どのように、だれが、いつ実施するのか、どのような変化が起こったら達

成したことにするのかを考える。「何を、どのように、だれが、いつ」という観点によって、学校変革のストーリーを描く。未来の子ども像に向かうために、どのような組織とカリキュラムが必要なのだろうか。学校変革のストーリーを共有すれば、管理職、主任、教師の一体感を高めることができる。「どのような変化が起こったら達成したことにするのか」は学校成果の指標である。

このように、三年先の「学校の未来図(好ましい未来)」から時間軸を後戻りして(backward), 「組織的計画」を作成する(mapping)ことを、バックワード・マッピングと言う^②。バックワード・マッピングは、「学校の未来図(好ましい未来)」を最初に考えるため、次の利点を持つ。第一に、将来を見通すことが可能になり、学校のビジョンを明確にできる。第二に、現状にとらわれないため、斬新なアイデアを出しやすくなる。つまり、バックワード・マッピングを活用した学校変革プランは、既存の学校経営計画の限界を方法的に乗り越えるものである。フォーマットは、スクールリーダーがすぐ使えるように意図的に簡潔にした。未来図を描き、未来図に到達するための計画を記述することによって、学校経営の展望を切り拓くことができる。

今回のFDでは、以上のような授業実践例を報告した。今後は、学校変革プランの作成だけでなく、その実施局面におけるリーダーシップと組織運営の検討が必要になるだろう。学校におけるリーダーシップとマネジメントの研究は進展してきている^③。筑波大学においても、最新の研究成果を大学院の授業に活用する所存である。

注

(1) Beare, H., *Creating the Future School*, Routledge/Falmer, 2001, p. 101.

(2) バックワード・マッピングの詳細は次の文献を参照。佐藤博志編著『オーストラリア教育改革に学ぶ—学校変革プランの方法と実際—』学文社, 2007年, 97-100頁。

(3) その動向は次の図書にまとめられている。

Bush, T., *Theories of Educational Leadership and Management*, 4th Edition, Sage, 2011.

II. 2010年度第2回授業力・研究力アップ研究会

1. 開催概要

(1) 日時

2010年12月15日 15:00-17:00

(2) 場所

教育学系大会議室(人間系学系棟B532)

(3) 発表者及び発表テーマ

田中マリア助教「筑波大学における『道徳教育Ⅰ・Ⅱ』の授業実践報告～eラーニング大学における授業実践との比較において～」

蒔苗直道助教「数学教育研究と教員養成」

2. 発表内容

〈発表1〉田中マリア「筑波大学における『道徳教育Ⅰ・Ⅱ』の授業実践報告～eラーニング大学における授業実践との比較において～」

今回、「平成22年第2回授業力・研究力アップ研究会」では、本学に着任後9カ月経過した時点における筆者の授業実践の様子等について、前任校での実践を交えつつ報告を行った。以下、発表の概要についてまとめる。

(1) 前任校の概要

筆者は平成22年3月まで八洲学園大学という平成16年に新設されたeラーニング大学において教鞭をとっていたが、そこでの実践はインターネットで行われる授業といった面だけでなく、経営方針や履修の進め方に関しても、歴史と伝統に基盤を置く本学とは異なる点が多く、前任校の概要を紹介することそのものが、すでに大学とは何か、大学は今後いかにあるべきかといった問題を考える上で示唆的な内容を含んだ、議論の素材と成りえるものと考えられた。そのため、当日の発表でも前任校の様子について詳しく紹介する時間を設けた。

八洲学園大学の概要

大学の種類	通信制大学 (eラーニング)
学生対象	社会人
学費	単位従量制授業料 入学金20000円, 学籍管理料 (6か月) 12000円, (T) テキスト履修 (1単位) 6000円, (S) スクーリング履修 (1 単位) 12500円, (SS) 少人数制限ス クーリング履修 (1単位) 15000円
在籍年限	最大16年

とくに、発表では前任校における学費の徴収の仕方が単位重量制授業料であったことと、そのことから生じる様々な問題、例えば、学問あるいは科目の必要性が受講者数によって決定されていってしまうことのメリットとデメリットについて筆者の経験を踏まえて説明を加えた。

また、前任校では学生たちが履修を検討する際、履修シミュレーション (全開講科目がそれぞれ価格つきで表示されている。学生は一覧表の中から受講したい講座をクリックし、選択する。講座はいくつでも選択でき、この機能を使えば自らの選択した講座の授業料の総計を確認することができる) システムによって受講科目を決定していくのであるが、前任校における学生たちの履修が最小限の単位数に抑制される傾向が指摘されていたことから、このような学費徴収の在り方はともすると学生たちの履修を抑制させる方向に働いてしまい、多様な履修の機会をうばってしまうことになるのではないかといった懸念のあることを指摘した。

(2) 授業実践の変化

授業実践に関しても、本年度、カリキュラム上の位置づけや対象者、科目の目的等の変化とあいまって、以下の通り変化してきたことを報告した。

(1) 八洲学園大学での授業実践

○「親と道徳教育教材倫」(~2010年3月)

授業形態	講義形式 (インターネット)
単位数	2単位 (90分×15回+試験)
単位認定の条件	2/3以上の出席, 定期試験
成績評価	平常点, 定期試験の点数
カリキュラム	家庭教育の専門 (選択必修)
対象	10代~生涯 (社会人)
出席	自動記録
平常点	質問機能, 掲示板
試験	レポート形式 (100点)
欠席者の対応	再配信, オンデマンド
授業評価	理解度ボタン (数値)

(2) 筑波大学での授業実践

○「道徳教育Ⅰ」(~2010年7月)

授業形態	講義形式 (対面式)
単位数	2単位 (75分×10回+試験)
単位認定の条件	出席 (2/3以上), 定期試験
成績評価	平常点, 定期試験の点数
カリキュラム	全学対象 (教職必修)
対象	10代 (学生)
出席	手動 (TA)
平常点	コメントカード (-2点から+2点)
試験	持込み可の記述式 (100点)
欠席者の対応	欠席届の提出
授業評価	自由記述式 (任意)

○「道徳教育Ⅱ」(~2010年11月)

授業形態	講義形式 (対面式)
単位数	2単位 (75分×10回+試験)
単位認定の条件	出席 (2/3以上), 定期試験
成績評価	平常点, 定期試験の点数
カリキュラム	全学対象 (教職必修)
対象	10代 (学生)
出席	マークシート
平常点	小テスト (3回実施。配点40点)
試験	持込み不可の記号式 (配点60点)
欠席者の対応	欠席届+課題の提出
授業評価	自由記述式 (任意)

ここではとくに、前任校における授業実践の様子について、実際の画像を参照してもらいながら説明を加えていったが、なかでも前任校では学生がネット上の教室に入室すると入室時間

が自動で記録されるため、出席管理の手間を必要とせず、教員もその分の余力を学生との質疑応答や授業の改善等、内容に注ぐことができていたというメリットと、一方で、入室した学生が最後まで受講しているか確認する手段として理解度ボタン（講義の内容を理解できたら「!」、理解できないときは「?」を押すボタン。理解度は毎分1%ごとに自動的に下がり続ける。学生は10分以操作しないと自動的に退席となる）を導入していたため、教員はリアルタイムで授業評価を受けることになっていたというシビアな一面もあったことなどについて説明した。

(3) 雑感

最後に、9カ月が経過した時点における本学での授業実践に関して、前任校における実践との比較において雑感を述べたが、そこでは例えば、本学に赴任し、授業実践は効率的になってはきているものの、「きめ細やか」で「厳格な成績評価」といった面においては、必ずしも授業の工夫がそれらを達成させるための方向性とはなっていないこと、むしろ、指導の丁寧さ、学生へのフォローといった面では、前任校における授業実践より退化してきたと言わざるを得ない状況に陥っていることについて報告し、その要因がカリキュラム上の位置づけ、つまり教職における必修科目という位置づけ上、前任校の数十倍の受講者数を担うことになってしまい、効率性を優先したことからくる必然的結果であることなどを報告した。

そして、現在、大学に求められている「きめ細やかな指導」や「厳格な成績評価」といった取り組みに対し、多人数を対象とした大教室での授業や一人が数百人を担当する現状があること、もし本気で大学においても「きめ細やかな指導」や「厳格な成績評価」を促進させようと考えれば、そうした授業の適正人数も視野に入れつつ抜本的に見直す必要があるのではないかと、少なくとも一教員の授業工夫、改善といった対症療法的な方法では限界にきているのではないかと、いった筆者の雑感を述べて発表のまとめとした。

〈発表2〉 蒔苗直道「数学教育研究と教員養成」

(1) JICA 研修の事例から

前任校の教員養成学部でも教育学系と同様に JICA の研修員を受け入れ、附属学校の授業を1週間連続して観察し、協議会を通して、日本の算数や数学の授業を理解する研修をしている。小学校では混み具合の単元を観察して、子どもが自分の考えで問題を解決する様子を見せている。この授業では、子どもの考えや話し合いがまとまらず、間違った考え方や答えが出され、授業の終わりでも正解に達しないまま、次の日の課題となることがある。

授業の協議会において、研修員たちの意見は批判的である。大勢を占める意見は、教師が教えていないひどい授業だという意見である。子どもが間違っているのに、なぜ正しい事を教えないのか、教師には正しい算数、数学を教える役割がある、さらには、このような授業をどうして見せるのかと、研修に対する批判も出る。

しかし、授業を毎日見ているうちに、子どもが本当に納得して、混み具合をとらえたことや、この後の授業展開の流暢さを目の当たりにして、この授業の意義について、自分たちで再評価するようになる。最終的には、この研修自体が、自分たちの問題解決活動であり、大学教授から日本の授業の意義を教えられるのではなく、自分たちで学んだことが、授業で観察した子どもの学習と同様の意義のあることだという意見が出る。

(2) 算数、数学教師のレベル

算数、数学の教員養成について、教師のレベルに関する杉山吉茂氏の考え方がある。①算数や数学の知識や手続きを教える教師、②その理由、意味を説明する教師、③それを子どもが発見、創造するように導く教師。多くの人が、①のみを教師の役割と考えている。しかし、このような算数や数学は覚えるべき事や習熟するべき事にはなるが、それ自体にどのような意味があるのだろうか。これは、算数や数学を学習することが義務となっている場合にのみ通用し、

受験等が終われば必要がなくなる。これに対して、②の教師は理由や意味の説明を通して、その背景にある算数や数学の考え方を伝えることができる。これは、子どもが算数や数学の意味を理解すること、そして、算数や数学を学習する意義について触れる機会を与えることになる。将来、学習内容自体を忘れても、その意義や考え方は失われないものとなる。

①にとどまる考え方や現状に対して、②までを視野に入れた授業をすることを、大学における教員養成の一つの目標とする。そして、③は実際の教育現場に出てから、実践を通して目指してほしいというのが基本的な考え方である。しかし、③は実際には、なかなか見ることできないため、大学の教員養成段階で何らかのアプローチはできないか、このために、前述の研修のような方法は使えないか。こうした問題意識のもとに実施した授業を紹介する。

(3) 大学の授業での試み

授業科目名「算数科教育臨床」は、初等教員養成の学部3年生後期の授業である。中等教員養成には「数学科教育臨床」を開設している。この授業以前に、算数科指導法の授業を通年30コマ、4週間の教育実習と付随する「事前・事後の指導」15コマ、「算数科カリキュラム論」15コマを履修している。授業シラバスは、授業ビデオ視聴、授業観察と協議会、模擬授業の計画・実施と協議会である。この過程で、子どもが算数や数学を発見、創造するように導くとは、どのようなことか考えることを目標としている。

難しいのは、教員が「これが子どもが算数や数学を発見、創造することだ」「これが大切なことだ」と教えないことである。授業や協議会において、学生が自分たちの話し合いを通して、何を得られるのかに任せる。授業を観察し、模擬授業をする附属学校の教員との連携が欠かせない要件となる他に、この授業に至るまでの事前の積み重ねが大きく影響する。大学のカリキュラム構成や、他の大学教員との情報交換もが関連してくる。

事前の積み重ねには、まず、学生自身が、数

学を自分で発見、創造する経験をしているか、その意義をとらえているかが出発点となる。多くの学生は、大学までの学習で、そのような経験をしたことがない。このため、大学での指導法などの授業での経験が重要になる。学生に問題を解かせ、それを振り返ったり、発展的に考えることを通して、数学を発見、創造できるような機会を様々な教材で何度も実施する。

次に、学校の授業で、算数や数学を発見、創造することが可能であることを認識しなければならない。教育実習や「事前・事後の指導」において、授業や子どもを観察し、協議会で話し合いをする中で、これを見取ることができるようにする必要がある。こうした積み重ねの後には、学生に任せる部分が多い。

授業を通じた成果は、学生の学習感想や授業評価アンケートなどから読み取ることができる。教員の意図やねらいを明示的に教えないため、とらえ方は学生により様々である。しかし、これが授業によって達成できた内容であり、教師を目指す学生が身につけたことである。

(4) 数学教育研究や実践の「ガラパゴス化」

このような授業実践は、数学教育研究の「ガラパゴス化」を招くおそれがある。授業に対する通常の見方では、間違いを許容しつつ、どのように正しい考え方に子どもの話し合いをコントロールするかが重要な視点となる。このための教師の発問や、誤りに子どもが陥らない問題設定や、子どもの理解の把握などが、研究すべき内容となる。しかし、この見方を超えたところに、子どもが算数や数学を発見、創造している過程や、その意義を見出すことはある。ここでは、極度に進化した教育研究や実践が、一般には理解されない「ガラパゴス化」が起こる。

このため、学生が教員になる時を想定して、初任研や教育現場との整合性にも気を配る必要がある。教育の理念の追求や研究の進展の結果として「ガラパゴス化」は起こり得るが、教育が現実の営みである以上、このことへの配慮は不可欠である。